

## 日本語教育における適応支援 —初年次教育としての役割からその先へ—

澁川 晶 武田 知子

### 1. 初年次教育としての日本語教育の役割

学生の多様化が進んでいる今、多くの大学において初年次教育が導入されている。共通する目標は受動的な学習態度から能動的で自律・自立的な学習態度への転換であるが、第一言語/継承語として日本語を学ぶ学生に対する教育については未だ手探り状態にあると言える。

国際基督教大学（以下 ICU）では、1年次に履修する日本語教育課程（以下 JLP）の第一言語/継承日本語コース（以下 SJ コース）が初年次教育の役割を担っている。これまで、大学生活に必要な日本語運用能力を身につけることを目標に、思考力と言語形式の育成を目指した内容重視の教育（ICU 日本語教育課程 2015）を中心に行ってきたが、近年の学生の多様化に伴い、日本の大学で学ぶにあたって不足している知識の補填、大学という場の理解、人間関係の構築等も含め、大学生生活全般への適応支援が求められるようになってきている。また、SJ コースの学生にとっては、これまでとは異なる環境において「自己」を客観的に捉え直す場として初年次教育は重要である。

青年期における他者の存在は、個人の発達に大きな影響があるとされる（溝上 2008）。宮下・杉村（2008）は、現代は人間関係の希薄化が進み、青年期の発達を困難にしていると指摘している。青年期の発達を促すという意味でも、初年次教育で他者との十分な対話の場を提供し、大学生生活の土台となる人間関係を構築できるようにすることが求められるであろう。

本稿では、2016 年秋学期入学生を対象に、同年秋学期と冬学期に実施した SJ コースにおける取組みとその成果について、適応支援という視点から振り返り、今後より充実したコースとするための課題発見に繋げたい。

### 2. 学生の背景

2016 年秋学期に SJ コース対象となる学生は 68 人であった。プレースメントテストの結果、筆者らが担当する SJ2 には 34 人が配置され、A と B の 2 セクションに分けて 1 セクション 17 名で授業を実施した。

学生の日本語レベルは一段階下の SJ1 のレベルに近い学生から上の SJ3 コースに近い学生までおり、かなりの差が見られた。また、読み、書き能力に関する日本語力の自己認識に違いがあり、自らの弱点を認識していない学生は SJ コースでの日本語学習に戸惑う様子が見られた。こうした学生に対しては、個別の時間に SJ コースで目指している日本語の読み、書きのレベルと学生の現状の力を明示し、それぞれの学生が目標を設定できるよう指導した。

言語についての意識を事前に尋ねたところ、母語である、アイデンティティの源、日

本で就職したいなどの理由で日本語を重視する一方で、グローバルな言語であり、大切、有利な言語である英語も保持していきたいという学生が多かった。さらに、中国語やスペイン語など他の言語力も身につけたいと考える学生もいた。

34人の背景は下記の表1から3のとおりである。

表1) 日本以外で居住したことの国・地域 (人)      表2) 日本語以外に使える言語 (人)

表1) 日本以外で居住したことの国・地域 (人)		表2) 日本語以外に使える言語 (人)	
アメリカ	10	英語	28
中国	3	英語とスペイン語	2
シンガポール、香港	2	英語と中国語	1
イギリス、インド、エジプト、オーストラリア、タイ、ドバイ、ニュージーランド、ベトナム、ベルギー、マレーシア、南アフリカ、メキシコ	1	韓国語	1
		無回答	2

表3) 通っていた学校 (人)

	小学校	中学校	高等学校
国内のインターナショナルスクール	13	14	13
国内の一般校	13	4	3
海外の現地校	12	8	8
海外のインターナショナルスクール	4	9	11
海外の日本人学校	3	3	1
海外のいずれかの学校+補習校	5	4	3

表1、2から、アメリカでの在住経験を持ち英語が堪能な者が多いことがわかる。このような傾向があることについては想像に難くないが、表3に示した、通っていた学校について一人ずつ丁寧に見ていくと、小・中・高校の12年間全て国内のインターナショナルスクールで学んだ者が10名(小4以降ずっと国内のインターナショナルスクールに通っていた者を含めると12名)、海外の現地校に通ったのは2年未満のみで、それ以外はずっと国内一般校で学んだ者が2名、また、海外在住ではあったが、小・中・高校全て日本人学校に通った者が1名いるなど、予想以上に日本・日本語との接点のある学生が多いことが明らかになった。

### 3. コースの概要

ICUのSJコースには4つのレベル(入門、1、2、3)があるが、本実践は、2016年秋学期にレベル2(SJ2)、同年冬学期にレベル3(SJ3)のコースで行なわれたものである。以下にその概要を示す。

### 3-1. SJ2の目標と内容

SJ2 コースは、70 分授業が週 4 コマ、個別指導が週 1 コマであった。コースの主な目的は、多様な読み物に触れ、大学生として知っておくべき知識を補填すること、大学生として相応しい読み書き能力を身につけること、他の学生との対話を通じて思考を深めることであった。授業内容は表 4 のとおりである。

表 4) SJ2 授業内容

文章表現 (A: 火 2, B: 火 3)	文章の書き方について各回ポイントを絞って説明し、練習をする。
新聞 (A: 火 3, B: 火 2)	授業で配布された新聞記事を辞書を使わず速読し、内容についてワークシートに従い理解を深め、意見交換をする。授業後、内容の要約や関連するトピックに関する課題を提出する。
読解 (A, B: 金 4, 5)	事前に配布され読んできた読み物について、記入してきたワークシートに従い内容について理解を深め、意見交換をする。授業後、内容の要約、内容に関する自分の意見を書いて提出する。
個別学習	週に 1 度学生と教員が 1 対 1 で会って指導を行う。
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビュー・プロジェクト 学内の教員にインタビューをして、クラス内で発表する。</li> <li>・レポート 社会問題から自分の関心のあるトピックをえらび、データを用いてクラスメートに内容を報告するとともに、レポートとしてまとめる。</li> <li>・クイズ 週に一度、新聞・読解・文章表現で学習した内容についてクイズを実施する。</li> </ul>

授業 4 コマのうち、2 コマで読み物とディスカッション、1 コマで新聞記事を題材にしたディスカッション、1 コマで文章表現を指導した。読み物や新聞記事はテーマを設定し、できるだけ多様な分野の知識に触れられるようにした。日本語で文章を読むことに慣れていない学生もいたため、SJ2 で扱う読み物は、具体的でデータや表が用いられている文章を中心とした。新聞記事は、まず、学生が今最も身近な問題として感じられる大学に関連する記事を中心に扱い、徐々に社会問題へと広げるようにした。学期の途中には学生に関心のあるトピックについてのアンケートを行い、最も多かった日本国内の格差に関する新聞記事を取り上げ、ディスカッションを行った（資料 1 参照）。

個別指導では、学生が書いたものへの指導や読み物の内容確認などを行った。9 月に入学したばかりということもあり、日本での生活、大学で困っていること、大学での勉強方法などについて話すことも多かった。

プロジェクトでは、学生が各自、話してみたい教員の研究室を訪ねてインタビューを行なった。また、最終課題として、社会問題となっているトピックを 1 つ選び、表やグラフなどのデータを用いて現状を 2000 字以上 3000 字以内で報告するレポートを課した。プロジェクト、レポートについては、それぞれ口頭発表を行なった。

### 3-2. SJ3の目標と内容

SJ3 コースは70分授業が週3コマ、個別指導が1コマであった。多様な読み物に触れ知識を補填すること、大学で求められる日本語の読み書き能力、特に文献を読みレポートにまとめる力を身につけること、他の学生との対話を通じて思考を深めることが指導目標であった。授業内容を表5に示す。

表5) SJ3 授業内容

文章表現 (A: B: 金 4)	文章の書き方について各回ポイントを絞って説明し、練習をする。 ブックレポート、期末レポート執筆の準備をする。
新聞 (A: 火 2, B: 火 1)	授業で配布された新聞記事を辞書を使わず速読し、内容についてワークシートに従い理解を深め、意見交換をする。授業後、授業で扱った記事に関連する記事を一つ自分で選び、その内容の要約、内容に関する自分の意見を書いて提出する。
読解 (A: 火 1, B: 火 2)	事前に配布され読んできた読み物について、記入してきたワークシートに従い内容について理解を深め、意見交換をする。
個別学習	週に1度学生と教員が1対1で会って指導を行う
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブックレポート 自分で選んだ「新書」を各自1冊読み、内容をクラスメートに報告する。発表時にはレジユメを準備し、その後、内容をブックレポートとしてまとめる。</li> <li>・期末レポート・ミニレクチャー 読んだ新書の内容から関連するテーマを見つけ、さらに深く調べてレポートにまとめる。まとめた内容を7分程度の短いレクチャーとしてクラスで報告する。</li> <li>・クイズ 週に一度、新聞・読解・文章表現で学習した内容についてクイズを実施する。</li> </ul>

授業3コマのうち、1コマで読み物とディスカッション、1コマで新聞記事を題材にしたディスカッション、1コマで文章表現の指導を行った。SJ2の読み物は、具体的でデータを用いた文章が中心であったが、SJ3では文芸作品やより抽象的な文章を扱った(資料2参照)。また、SJ2ではこちらが用意した質問に基づき文章を読んできた事前課題を課していたが、SJ3では途中から学生自身が問いを立てる課題を課し、課題の難易度を上げた。

個別指導では、SJ2同様授業内容やプロジェクトに関する指導を行なった。2学期目に入り生活の慣れや疲れから体調を崩す学生、授業を休みがちな学生に対しては生活全般に関するアドバイスをすることもあった。

総合課題として新書を1冊読み、内容をブックレポートにまとめた。さらに、最終課題として、ブックレポートから興味を持った内容を複数の資料を用いて3500字以上4000字以内にまとめる期末レポートを課した。ブックレポート、期末レポートそれぞれの内容について口頭発表も行った。

このようなコースの中で、言語教育における適応支援を意識してデザインした授業、

およびプロジェクトワークの実践とその成果について次節で報告する。

#### 4. SJ2 での取り組み

##### 4-1. 知識の補填とクラスメートとの関係構築

2 節で見たように、本コースを受講している学生は、大学入学前の生育・教育環境が多様であり、それぞれが持っている常識も文化的背景も異なっている。大学生として求められるであろう知識を補填しつつ、一人ひとりが持つ多様性を生かした多角的な視点からの議論ができることを期待し、新聞記事を扱うことにした。

授業では、まず、新聞記事の見出しにより内容を予測し、関連知識をどの程度持っているかをクラス全体で共有した。その後、各自で記事を読み、タスクシートに沿って理解を確認し、ペアで意見交換をした（資料 4 参照）。日本事情やニュースに明るくない学生も不安なく臨むことができるよう、事前の情報共有と意見交換を通して理解を深めることとしたが、この過程で、同じ記事を読んでも人により解釈や意見が異なることを理解し、話し合うことを体験した。繰り返しこのような作業を行い、異なる価値観を持つクラスメートを理解し受け入れることにより、初年次教育では重要な要素の一つである人間関係を構築することの一助になったのではないと思われる。

また、コース開始前に実施したアンケートから、SJ2 の学生の多くは日本語の新聞を読む機会が非常に少なく（もしくは皆無で）、日本語の新聞に対して非常に苦手意識が強いことが明らかになっていたが、この新聞記事を読む授業を通して苦手意識をある程度軽減させることができたように思われる。辞書を使わずに、授業当日配布した新聞記事を「速読」したのだが、最初は拒否反応を示していた学生も、クラスメートとの共同作業により自信をつけ、自身が持っている知識・経験を活用して読むことにも慣れ、次第に強い抵抗を感じることなく記事に向き合えるようになっていた。授業後に実施したアンケートでも、「自分の知識不足を認識した」「日本語の新聞を読むきっかけとなった」「多様な考えに触れることができた」など肯定的なフィードバックが多く、「日本語の新聞が読めた」という喜びから、「自分でも読んでみよう」という前向きな気持ちに繋がり、徐々に日本語の記事、日本に関するニュースに接する機会も増えていった様子が見てとれた。知識を補填し、クラスメートとの人間関係を構築することを目指していたが、一定の成果があったと言える。

##### 4-2. 大学という場の理解

大学での学びを成功させるためには、教員とコミュニケーションができることも大切である。SJ2 ではインタビュー・プロジェクトを行い、JLP 以外の教員との接点を設け、教員の話を通じ大学という場を理解すること、大学で学ぶことを動機づけることを目指した。

プロジェクトは、①依頼メールを書く、②研究室を訪問し「学ぶこと」について話を聞く、③お礼のメールを書く、④発表を準備し、報告する、⑤活動を振り返る、という 5 段階で行った。プロジェクトにより、メール、対面での敬体を用いたコミュニケーションを体験することも目的の一つであった。

依頼メールは、文章表現の時間に敬体でのメールの書き方を練習した上で、実際に送ることとした。丁寧な依頼表現で初めてメールを書くという学生も多く、指導後に修正をしてメールを送った。お礼のメールは各自で送ることになっていたが、送信前に確認を求めてくる学生も多く、丁寧に失礼のない日本語が使えるようになりたいと考えている学生が多いことがわかった。プロジェクトが、教員と日本語でコミュニケーションする機会となり、よい練習になっていたようである。

プロジェクト後に書いた振り返りシートには、「最初から自分が何をしたいのか決まっていたわけではないのだなと少し安心した。今焦らなくてもじきに何がやりたいか定まってくると先生の話から考えることができた」など、インタビューを通じて将来への見通しが得られたという意見が多かった。

また、「大学は必ずしも勉強が全てではないということ学んだ。『希望を持って前に進むこと』が学ぶことだと先生は述べてくれた。前に進むことが学ぶことであり、前に進むために学ぶ必要がある」、「授業で学ぶのではなく、授業が学ぶきっかけとなり、そこからどのように自分で視野を広げていくかが学ぶ事だ」など、学びへの気づきが得られた学生もいた。

さらに、「『人生は短い、だから無駄にできない』ということ、再確認することができ、自分も人生を無駄にしないよう、学び続けていきたいと思った」、「生活が安定する額がもらえる職業に就いた方がいいと思っていた私の考えが、先生のインタビューで挑戦する気持ちに変わった」など、考え方の変化を報告する学生もいた。

振り返りシートのコメントを見ると、こちらが想像した以上に、学生が生活の変化に戸惑い、悩んでいた様子わかる。「大学生生活を始めて早々、私は大学での勉強に対しての疑問を持ち始めて、日々ストレスで苦しんでいた。しかし、先生の教育理論と教育、勉強に対する考え方を聞いて、頑張ろうという気持ちが初めて出てきた」というコメントにあるように、プロジェクトにより、入学後焦っていた気持ちがなくなり、学ぶ意欲が戻ったという報告が多くあり、初年次に教員と話すことが、大学への適応や学びへの動機付けに大きな意味を持つ可能性があることがわかった。

## 5. SJ3での取り組み

### 5-1. 自分を知り世界を広げる

前節で見たように、SJ2の新聞記事を読む授業では、日本語で書かれた新聞記事を読むことに慣れ、知識もある程度補填でき、クラスメートとの相互理解も深めることができた。しかしながら、議論や提出された課題（ワークシート）の内容を見てみると、記事の内容について理解が浅く、非常に表面的な感想に終始していたり、記事の内容（主張）に対して一方的に批判・反論を展開し、自己が持つ価値観・世界を広げるまでには至っていないと思われることが多くあった。また、本コースの学生は経済的に恵まれた環境にある者が多いためか、そのような恵まれた環境にない者や世界に対する想像力に欠ける傾向が見られた。

そこでSJ3では、「多様性」をテーマの中心に据え、多様な世界に触れて自分の世界を広げることを目指すことにした。取り上げたのは、「難民・不法滞在者」「発達障害」「沖

縄が抱える問題」 「性的少数者」に関する記事である（資料2参照）。

授業内ではSJ2と同様に辞書を使わずに自力で読む練習をし、ワークシートに従って内容確認をした後、クラスメートと議論することにより理解を深めた。授業後には、授業内で読んだ内容に関連する記事を新聞やインターネット上で探して読み、事実（記事が伝えたい内容・メッセージ、その問題・状況が起きた背景、今後どのように事態が発展していくか・意義は何かなど）と意見（なぜその記事を選んだか、記事を読んでどう考えたか）をまとめて提出することを繰り返した（資料5参照）。

その結果、自分達が知らないことがいかに多いか、これまでいかにこのような問題に目を向けてこなかったかに気づき、驚きながらもそれらの問題をまっすぐ見つめ考えようとする姿勢が見られた。その過程で2つの傾向があることに気付いた。一つ目は、授業後の課題への取り組み方に見られる傾向である。最初は、授業で扱った記事の内容と類似の記事を選ぶ者が多く、キーワードで検索して出てきたものを深く考えずに選んだような記事が多々あり、中には、同じ内容を書いた他社の新聞記事を選ぶ者もいた。しかし、徐々に、別の視点から記事の内容をとらえようとしたり、記事で扱われている事象の前後について知ろうとするなど、授業で読んだ記事を起点として興味関心が広がり、広い視点から考えようとする傾向が見られるようになった。例えば、「性的少数者」に関する記事（男女らしいということ、結婚と子供を持つということについて）を読んだ際には、当事者の苦悩を描くような記事だけでなく、性的少数者の権利を認めた際にスポーツ界で生じる問題に興味を持ち、これまでにスポーツ界でどのような事例があり、今後オリンピックなどではどのように対応しようとしているのかについて書かれた記事を選んだり、企業の性的少数者に対する取り組みについて取り上げた記事を読み、企業が性的少数者をサポートすることの意味について考えようとする者がいたりした。

二つ目は、記事の内容による学生の姿勢に関する傾向である。記事の内容と自分自身との距離・接点の有無によって議論する際の態度が大きく異なり、距離が近ければ近いほど頑なな態度をとり、他者の意見・主張を受け入れない傾向が見られた。例えば、「沖縄が抱える問題」について読み、米軍基地があることの影響について話し合っている際、沖縄在住経験がある者は記事の内容に対して批判的な態度を示し、「米軍があるから犯罪が多いとは言えない。もしそうだとすると、アメリカに帰れと言うことは、アメリカでなら犯罪が起きてもいいと考えていることの証しだ」と強く主張し、クラスメートが新たな視点からの議論を提案しても、記事とは異なる意見を述べても、それらには拒否反応を示し、ただ持論を展開することに終始していた。本人に、接点のない話題については、記事の内容も他者の意見も素直に受け入れることができるのに、接点のある話題になると態度を硬化させる傾向があることを伝え、話し合ったが、その時の学生の言動からは、「この点（問題・話題）については負けられない」というような意識が背後にあるように感じられた。

このように、授業で与えられた記事を読んで終わるのではなく、そこから自分自身で関連する記事を選んで読んだり、クラスメートとディスカッションをしたことにより、一人ひとりが自分の理解・認識に気づき、自分なりに世界を広げることに繋がったと言える。もちろんその変化は個人差が大きく、「キーワード検索でかかった記事を適当に

読む」という枠を脱することができない者もいたが、それでも、毎週、授業内で読んだ記事についてクラスメートの意見を聞き、多様な考え方・視点があることを知り、また、授業後記事を探して読むという過程を経たことによって、自分で選んだ記事を読む満足感を得るとともに、記事を読むことに対する動機づけを得ることができたように思う。

## 5-2. 自己・他者の深い理解

SJ2の段階では、読み物の内容を正しく読み取ることができない学生、内容を他のものと関連付けたり、文章全体を見通しながら内容を理解するなどの深い読みができない学生が多かった。日本語でまとまりのある文章を読んだ経験が乏しく、読むだけで精一杯という様子の学生もいた。また、ディスカッションでのやり取りや課題の文面からは、学生の視野の狭さ、想像力の欠如、独断的な面が見られた。

そのことを考慮し、SJ3では、身近な出来事を多様な面から考えられるような読み物を選ぶようにした（資料2参照）。また、各学生が自分なりの視点を持ちながら読み物と関わっていけるように、SJ3では読む前と読んだ後の課題を変更した。SJ2での読む前の課題は、書かれたものを正確に読み取れたかを確認する問いが中心であったが、SJ3からは、要因や背景について既有知識を用いて推論して答えるような問い、さらに、自ら問いを立てる課題を段階的に加えていった（資料3参照）。読後の振り返り課題は、SJ2まで行っていた「内容要約」と「意見述べ」から、「自分が気になったところとその解説」、「ディスカッションも踏まえてのコメント」に変更した。

課題の質が変わったことについては、以下のコメントのように、ディスカッションで意見を交換する意義を感じるようになったと肯定的に受け止める学生が多かった。

読解の課題文の中だけではなく私の知識を使って答えなくてはならない質問があってそれが難しかった。（中略）難しいと感じたけれど、クラスでのディスカッションによって人それぞれの観点からの意見が知れた上、私自身も文を読解するだけではなく自分の知識を交えながら考えることができた。これにより、無縁だと思った内容でも知識として取り入れようと思った。また、読解文を応用して自分の意見を述べることによって、その文を本当に理解しているか確認できた気がした。

考え方だけではなく、「Aさんは『声を汲み取る』という表現を使ったのに対し、私は『心の声に気がつく』という表現を使った。このようなことから、ディスカッションを通して語彙力や表現力が少しずつ向上していると思った」と、多様な日本語表現を学ぶことができたとする意見もあった。

SJ3での大きな試みは、5つ目の読み物からダンら（2015）を参考に、自ら質問を作る活動を取り入れたことである。質問づくりは、授業で質問づくりのルールを提示した後、まず、個人で問いを作り、その後グループで問いを作成、最後に、その問いについてグループでディスカッションをするという活動であった。学生からは、自分自身で問いを立てることについて、「同じような形式の質問になってしまい、適切な質問を作る



のはとても難しい]、「質問を作るためにはテキストをほぼ完璧に理解していなければ不可能だ」と戸惑いの声もあったが、繰り返し行っていくうちに、「他のグループの質問をじっくり聞けて、その上話し合えたため、与えられた読み物の深さがもっと理解できた」等と、活動を通じて理解が深まったことが報告されるようになった。

また、読み物と自分の経験と結びつける以下のようなコメントも SJ3 から多く見られるようになってきた。

「社会的弱者と言語的弱者は、ほぼ等しい」、私はこの言葉が気になった。帰国子女である私は、日本語において「言語的弱者」であるかと自分に思わず問いかけた言葉であった。英語を主に使って、人とコミュニケーションしてきた分、母国語では言語力のレベルが英語ほど追いついておらず、「自分は言語的弱者なんだな。つまり、日本においてはまだ社会的弱者なんだな…」と痛感した。

さらに、読み物やディスカッションを通じて自己理解を深めた、という次のような振り返りコメントも見られるようになった。

私も生きる意味を問いかけたときが何回かある。しかし、それが普通であることは、この読み物と話し合いで初めて知った。(中略) さらに、私が思い通りにいかない人生を歩んでいたことが、他のみんなも同じであったことに安心を感じた。「問いについて問う」など考えたこともないことを話し合っ、私は自分をもっと理解したと思う。自分は一人ぼっちではないと実感した。

SJ2 での文章の意図を正しく読み取る練習を経て、SJ3 で多様な見解が可能な読み物を読んだこと、それに合わせ課題を変えていったことで、学生は既有的知識や自分の経験と関連づけて意見を述べられるようになっていった。また、SJ3 での学生のコメントを見ていくと、度合いは異なるが、それぞれの学生が読み物を読み込み、思考を深めていく様子が見えてくる。学生の日本語読解力にはまだ課題は多いものの、日本語で文章を読み思考し、自分の考えを他者と共有し学んでいく土壌を培うことができたのではないだろうか。

## 6. ケーススタディー

2 学期間同じコースで学んでも、学生によってその変化・成長は大きく異なる。ここでは、小学校から高校までの学習環境が全く異なる特徴的な 2 名を取り上げ、その変化を辿ってみたい。

### 6-1. 日本のインターナショナルスクールで教育を受けた Y さん

Y さんは小学校・中学校・高等学校の全ての教育を日本国内のインターナショナルスクールで受けた経験を持つ。入学当初に「私と言葉一過去・現在・未来」という題名で書いた作文には、「母語は日本語だが、日本語より英語のほうが得意だ」「英語はグロー

バルな言語で一番大切な言語だと思うが、日本語のほうが温もりを感じる」「今後、日本語を日本人らしく、日本人に通じるようにマスターしたい」と書いており、自分と言語（英語・日本語）との関係を客観的に把握できていることがわかる。

Yさんが提出した「読解」の課題を見てみると、日本語については、「です・ます」体から「だ・である体」に移行し、次第に自然に使いこなせるようになっていくことが確認できる。また、使用する語彙が増え、文法的な誤りが少しずつ減少していることもわかる。しかしながら、内容理解の点から見ると、特にSJ2のはじめは、キーワードをつないだような、非常に表面的な要約文が多く、読んだ文章が伝えようとしているポイントとは異なるところを取り上げていたり、要約文の中に自分の考えや意見が混在していることが多かった。また、内容に関するコメントを見ると、「おもしろかった」「わかりやすかった」「苦手なタイプの文章なので、クラスメートの議論を聞いても何も感じなかった」「内容が薄いので特にコメントすることはない」などと書かれており、内容について深く考え議論することを避けている傾向が見られた。授業中のYさんはクラスメートとの議論にも積極的に参加し、質問を投げかけたり、聞かれた問いには自分なりに考えて答えようとする姿勢が見られていたのだが、それが文章に書いて表すというところまでは結びついていなかったのかもしれない。

## 6-2. アメリカの現地校（補習校）で教育を受けたHさん

Hさんは、アメリカで生まれ育った。入学当初に「私と言葉一過去・現在・未来」という題名で書いた作文には、日本語は母語だが、自分の気持ちを表すには英語の方が適切だと感じているとある。しかし、日本で生活し、日本で就職もしたいので、これからの4年間は日本語を猛特訓しようと思っていると述べられており、将来のことを考え、母語である日本語に向き合おうとしている様子が見られる。

作文にあるように、Hさんは日本語で自分の考えを述べることに苦手意識を持っていた。SJ2で提出された課題は、助詞や語彙の選択の誤りが見られ、再提出を求めることも少なくなかった。読解力も弱く、クラスでのディスカッションを経ても読み違いが修正されないまま要約の課題をしてしまうこともあった。しかし、本人は日本語をしっかりと勉強したいという熱意があり、クラスの課題にしっかりと取り組んでいた。SJ2終了時には、少し日本語で書くことに慣れてきたが、クラスでのディスカッションでは聞き役に回る事が多く、読解力に不安を持っている様子が見られた。

SJ3になると、Hさんの読後コメントには、「小さい頃から、自分の気持ちを直接の言葉に表すことが苦手で、母と喧嘩になることが多かった。筆者の言葉によると、これは母のコミュニケーション能力が欠けていることと、私が気持ちを伝えることができない弱者であるからだと思う」などと、過去の経験と読み物の内容を照らし合わせる記述が見られるようになる。当時はうまく説明することができなかった出来事を言語化することで、過去の自己と対話し、自己理解を進めていた様子が見える。

日本語力については、SJ3の課題で新書を読破し、「日本語で書かれた本をあまり読んだことがないので、意外と簡単に読めたことに驚いた。特に新書という、難しい情報がいっぱい詰まっている本を理解できたことに感動した」と述べている。この課題で読

解力が身についたことを知り、期末レポートにも積極的に取り組んでいた。レポート完成後には、「私がこのぐらいのレポートを書けたことに感動している。レポートの文字数を知った時、焦りしか感じなかったが、この経験を通して、次に同じようなレポートがあっても冷静に取り組めると思う」と述べている。また、最後のレポートの発表についても「今までの発表の中で、このミニレクチャーが一番適切に内容を伝えられたと思う」と、自分の成長を実感している様子が見られた。

Hさんは、アメリカから単身来日した理由を、「日本に住んでいたらどのように変わるかと思い、日本の大学に行くことを決心した」と述べている。何かを変えたいと来日したHさんは、SJコースで同じような背景をもつ仲間と出会い、多様な課題に丁寧に取り組んでいた。その結果、2学期間では大学で充分通用する日本語力に達したとはいえないものの、日本の大学でやっていけるという自信をつけることができた。初年次教育として、能動的な学習態度を身につけるとい課題については、ある程度達成できたといえるのではないだろうか。

## 7. 今後の課題

以上見てきたように、インタビュー・プロジェクトのような活動を入学直後の学期に実施することは非常に効果的であった。発表の内容から、学生が想像以上に多くのことに不安を感じていることがわかったが、その不安を減少し、大学への学びにスムーズに入るために、教員へのインタビューからの学びは大きい。自分が行ったインタビューだけでなく、他の学生の発表を通して、多くのインタビューの内容を聞くことで学んでいる様子が見られた。

また、2学期を通して行った読み物、新聞記事、他の学生の発表、ディスカッションから学生が学ぶことは多いと言える。特に小さいグループでのディスカッションは、人間関係の構築、知識の補填の面で有効であり、学生はSJコースでの課題に取り組むことで、それぞれの「自己理解」を深めていることも明らかとなった。

しかしながら、課題も残っている。SJ2とSJ3の2学期を通して日本語力そのものが向上し、深く考えられるようになったとしても、そのことを文章で表現できなければ大学におけるアカデミックな要求には答えられない。今回、事後課題などで振り返りの時間を設け、内省したことを言語化する機会を与えることが知識の獲得、自己・他者理解を深める点で重要であることは確認できた。しかし、そこで深く考え議論することを避けるなどの姿勢がみられた場合、それはどうしてなのか再考を促す場を設けるといった教育的対応が必要であった。大学での学びに対する前向きな姿勢、ディスカッションや発表で発揮した口頭能力、その過程で得た知識やスキルをいかに文章表現の力として表出させるか、この点は初年次教育としての日本語教育が今後取り組むべき課題であろう。

## 参考文献

- ICU 日本語教育課程(2015)「2013年度JLP新カリキュラム報告」『ICU日本語教育研究』11, pp.45-95  
ダン・ロスティン、ルース・サンタナ著、吉田新一郎訳(2015)『たった一つを変える

だけークラスも教師も自立する「質問づくり」』新評社  
溝上慎一（2008）『自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社  
宮下一博・杉村和美（2008）『大学生の自己分析 -いまだ見えぬアイデンティティに突  
然気づくために』ナカニシヤ出版

### 資料 1) SJ2 教材一覧

#### テーマと読み物

大学生生活：星野道夫（2003）『魔法のことば』 スイッチパブリッシング（p.13-p.35）  
多文化社会：藩英峰（2015）『思春期ニューカマーの学校適応と多文化共生教育』明石出版（p.9-p.17）、宮崎幸江編（2013）『日本に住む多文化の子どもと教育』上智大学出版（p.14-15,47-48,70-71,165-166）  
女性：黒田龍彦（2002）「難民救済に懸けた十年」『緒方貞子という生き方』ベストセラーズ（p.46-p.70）  
子供：高橋登（2004）「子どもにとってのお金の意味」『現代のエスプリ』至文堂（p.83-p.90）  
自然：「イルカ漁問題視資格停止」朝日新聞 2015 年 5 月 10 日 朝刊  
「日本の資格停止解除」朝日新聞 2015 年 7 月 10 日 朝刊  
「イルカ入手問題、どう対応」朝日新聞 2015 年 6 月 6 日 朝刊  
データの読み方：谷岡一郎（2007）「第 2 章 マスコミはいかに事実をねじ曲げるのか」『データはウソをつく』筑摩書房（p.42-p.88）

#### テーマと新聞記事

教育：「大学は『実学』を教えた方がいい？」朝日新聞 2015 年 7 月 25 日 朝刊  
「国立大、文系見直しを」朝日新聞 2015 年 6 月 9 日 朝刊  
「職業大学の創設を答申」朝日新聞 2016 年 5 月 30 日夕刊、2016 年 5 月 31 日朝刊  
政治：「参院選 18 歳選挙権 世代を超え考えよう」朝日新聞 2016 年 6 月 20 日 朝刊  
「18・19 歳の半数、比例区で自公に投票」朝日新聞 2016 年 7 月 11 日 朝刊  
「憲法改正」安倍晋三氏 HP より  
「(耕論) 憲法 9 条のリアル」朝日新聞 2015 年 5 月 1 日 朝刊  
自己探求：体験学 外国人観光案内ボランティア①②③④⑤朝日新聞 2015 年 7 月 27-8 月 3 日夕刊  
社会問題：教えて！格差問題①「論点はどこ？」朝日新聞 2015 年 3 月 19 日 朝刊  
教えて！格差問題②「主要国と比べて日本は？」朝日新聞 2015 年 3 月 20 日朝刊  
教えて！格差問題⑤「税の再分配機能 日本はなぜ弱い？」朝日新聞 2015 年 3 月 20 日朝刊

### 資料 2) SJ3 教材一覧

#### テーマと読み物

コミュニケーション：平田オリザ（2012）「第 7 章 コミュニケーションデザインという視点」『わかりあえないことから』講談社現代新書（pp.166-183）  
文学：村上春樹（1987）「納屋を焼く」『蚩・納屋を焼く・その他の短編』新潮文庫（pp.52-79）、清水義範（2006）「終章 鏡よ、鏡よ！『アフターダーク』」『村上春樹はくせになる』朝日新書（pp.207-211）  
メディア論：内田樹（2010）『街場のメディア論』光文社新書（pp.84-96）  
文化論：中沢新一（2009）「東京タワー」『ちくま評論入門』筑摩書房（pp.100-106）  
歴史：小熊英二（1996）「神話をこわす知」『知のモラル』東京大学出版（pp.71-85）  
哲学：鷺田清一（2010）「問いについて問う」（pp.9-21）『わかりやすいはわかりにくい？』ちくま新書





